

ケシダ属に、後者は狭義のイヌワラビ属やヘラシダ属 *Diplazium* に一致する型であった。オオシケシダでは葉軸の溝の両側は羽軸の分岐点でも分断されない。したがって、羽軸の溝は葉軸のそれに延着しない (図 1-1)。 *D. sorzogonense* では切断され、延着している (図 1-2)。したがって、溝の構造でオオシケシダは、ヘラシダ属に含めるよりは、ミヤマシケシダ属とすることが正しいと思われる。しかし、本種はミヤマシケシダ属のどの節に帰属するものか問題がある。英文欄で記したように、根茎の状態、りん片、葉身の毛の有無などの性質で、種としては明瞭に区別されるが、シケシダ *Lunathyrium japonicum* に最も近縁であると思われる。したがって、シケシダ節に含めるのがよいかも知れないが、この節は主に根茎がほふくする特徴で、他の二節から分けられるので、それが直立するオオシケシダを含めるには疑問が残る。

そこで、所属する節については問題が残るがオオシケシダをヘラシダ属からミヤマシケシダ属に移し、詳しい記載を発表した。

○ケンペルの記録した日本名 ツバキ 古品種 (津山 尙) Takasi TUYAMA: Old Japanese cultivar names of *Camellia* in Kaempfer's *Amoenitatum Exoticarum*.

ケンペルの *Amoenitatum Exoticarum*, 1712 には栽培ツバキを *Tsubakki hortensis* とし、ここに 23 種の日本名による園芸品種を記録している。これらは以後の西欧の文献にも絶えて見られず、忘れ去られていた。稀な場合として故 H. H. Hume 教授の *Camellias in America*, 1946 に名のみが引用されているぐらいである。これらは果してどのようなものであったのであろうか。近年、日本においてもツバキ園芸の研究が盛んになるにつれて、古い出版本の研究や、古写本の発見が多くなされ、今はその一部を明かにすることが可能になった。おしいことに、ケンペルは花などの記載を残していないので、品種自体の同定はほとんど不可能であるが、少くとも名称の上での同定はある程度可能になった。

次に上記の品種を、ケンペルの表記のままに挙げ、( ) 中にそれに当てた日本名を記した。ただし、アンダーラインのあるものは著者のあて推量であって、今の所文献の後づけのないものである。

Benke (弁慶), Borri (堀), Commakura Sasanqua (鎌倉山茶花), Dsjurin (重輪), Fidsjirimim (緋縮緬), Fino botan (緋の牡丹), Jedo dairin (江戸大輪), Jedo momidsji (江戸紅葉), Josttsjino donno (吉野殿, ? 与市殿), Itokuri (絲繰), Kaisan (開山), Kara ito (唐絲), Kikjo (桔梗), Kommatz (小町), Kosjam (小シャム), Meokin (妙喜院), Nankin (南京), Osjam (大シャム), Saifu botan (宰府牡丹—現在, 宰府, 才布, 財布などといわれる一品種がある), Siratamma (白玉), Sjinkuri (苾鐫), Sokkobin (蜀江紅, 現在蜀紅という品種があるが, 語源

的には蜀江が正しい。あるいは底紅か), Usirasji Borri (後紋)。

昔から「シャムロ」という品種があり、「社室」と書かれたこともあるが、これはタイ国の日本における旧名に基くものであると推定している。これに大小種の区別をしているものとした。「重輪」は「十輪」, 「中り丸」とも書かれたことがある。仮名に濁点がない時代に、だんだん別の字に変わって来たものらしい。「後紋」は少し苦しい当字である。ケンベルは「堀」に関係づけて写音しているようである。「芯鑷」はおしべが退化していて、くり取ったような花型のものであるらしく、現在のシベナシワビスケ(本誌41巻12図版上参照)の如きものであったと思われる。「芯鑷」は剪花翁伝 1851のワビスケ(実はシワビスケ)の項に、このような状態を示す一般的客語として用いられている。「鎌倉山茶花」はツバキの品種ではなくて、ハルサザンカの品種群に入るものであり、今日の「鎌倉紋」にあたるものであろうか。剪花翁伝の「鎌倉山茶花」を中だちとしての推定である。

西欧人に対して特に厳重な警戒と制約を加えた元禄時代の徳川政府の下で、ケンベルが二度の江戸参府旅行の間に植木屋かまたはこういう植物にくわしいどのような人と接触し得たのか今ではもう分らない。彼は恐らくこれらの実物は見てはいないと思われるが、その写音はおおむね正しいことが分る。彼の記録した品種の一部は現存の品種と呼称が全く同じであり、または関連がある。また他の一部は幕末の文献にまで断続して残っている。アカデミーの外の世界での「植木屋の伝統」の根強さを遺憾なく示していることは注目すべきことである。以上の文をまとめる際に、典拠とした多くの文献類に関しては読者の興味の外にあると考えてここでは省略した。

(お茶の水女子大学)

### ○ボルネオ島産クルマバモウセンゴケの染色体数(近藤勝彦) Katsuhiko KONDO: Chromosome number of *Drosera burmanni* Vahl from Borneo.

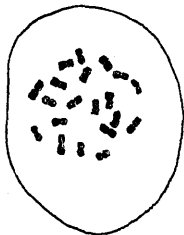


Fig. 1. Somatic chromosomes ( $\times$ ca. 1450) of *Drosera burmanni* Vahl from Borneo  $2n=20$ .

クルマバモウセンゴケは沖縄以南、東南アジア、インド、オーストラリア北部という広い分布をする。花卉は通常白色であるが、ボルネオ島ブルネイ地方には赤色のものが自生する。1964年、大阪市立大学理学部附属植物園の立花吉茂氏らがボルネオ島に植物調査旅行に行かれた際、これが採集、生品が日本にもたらされた。それ以来、二、三の人々により栽培、系統が維持されている。今回この系統のクルマバモウセンゴケの染色体数を調べてみた。根端細胞で  $2n=20$  (Fig. 1) であった。この結果は Venkatasubban (1950) がかってインド産の同種を使用して得られたものと同じである。ボルネオ島産クルマバモウセンゴケがインド産のものと染色体数にな